

# ★ 回りて向かう れい 霊ってなんだろう？

「あなたは霊の存在を信じますか？」、「私、実は靈感が強いよ。」、「あの仏像からは凄まじい霊性が放たれている！」などなど、『霊』という名のつく話題で盛り上がるという経験、実際のところ皆さんの日常にもよくあることなのではないでしょうか？

実は、この霊という言葉には似たようで微妙な違いがある3つの意味の捉え方があります。今回は、普段なかなか面と向かって切り出せない霊の話題について、一般的な仏教の観点と、あくまでも私の個人的な哲学とを交えながら述べていきます。以下の拙文が皆さんの供養の気持ちをより高める一助となれば幸いです。

## ① 幽霊（お化け）としての霊

「坊さんって幽霊とか見えるが？」、この質問を受けることは今でもよくあります。率直に言いますと、私に限って言えば、幸か不幸か私には幽霊は見えません。では他の坊さんはどうなのかと問えば、私の知る範囲で幽霊が見えるという坊さんは、分母を本宗の僧侶でざっくり100人位として、その内の10人位というのが実情です。そして意外なことに、この割合でも恐らく他の宗派よりも多い方なのです。つまりは、現代のほとんどの坊さんは幽霊が見えないというのが実情です。

そもそも幽霊とは何なのかという定義が抜けていましたが、ここでは俗にいうお化け的に怖れられ、且つ奇妙で人型のものを幽霊とするならば、原始経典や大乘経典に於いてその存在は認められません。

ですから、いわゆる地縛霊や怨霊などという概念は仏教には存在せず、それらは古来の神道や民間信仰の中にあつた、人々が持つ素朴な畏れがマイナスに働いたものだとして私個人は考えています。しかし、見えるものは見えるのだから仕方がないというのが実際のところでしょうから、私は幽霊の存在を否定はしていません。むしろ私にも幽霊が見えた方がもっと世界に彩りが足されて毎日の刺激が増えるだろうと思うのですが、生まれつき幽霊が見えてしまって真剣に悩んでいる人もおられるでしょうから、そのような発言は慎まなければならないのかもしれないかもしれません。

そこで、皆さんに考えてもらいたいのは、人間の認知に普遍性は存在しないということです。この世のあらゆる事象は、あくまでも結果的に多数派によって秩序付けられてきたので、古今東西で例外はたくさんあつて当然なのです。靈感なども、一方では芸術的感性として昇華されてアウトプットされ、やがては世間から拍手を持って向かえられる場合もあれば、個人の意識の範疇の中で鬱々と纏わり続けることもあるでしょう。もし、それが如何とも辛いと感じる時は、いつでも私にご相談下さい。ただただ傾聴することはもちろん、いろいろなアプローチや仏教からの智慧を提供させていただきます。

## ② 靈魂（スピリット）としての霊

①で予想以上に字数を使ってしまったので、ここはズバっと申し上げたいと思います。靈魂とは実は我々のことなのです。正確に言うと我々の存在自体が靈魂なのです。もっと踏み込んで言うと、我々人間の本質は意識に他ならず、この「私が在る」とする証明不可能な意識こそ靈魂の働きに依るものです。（\*魂が輪廻転生するという説とはまた違う趣で述べています。）

けれども、靈魂と肉体、つまり意識と肉体の二元論で世界は認識されるべきではなく、自我とも呼べる意識があらゆる物質を認識し、そして言語が用いられることによって此の世は在るのです。元来の仏教ではこの自我を非我として捉えることで、小さな個としての認識を超越してより大きな何ものか一つになろうと修行者たちは試み続けてきました。その境地がいわゆる悟りとか涅槃と呼ばれるものです。アメリカンインディアン達が言うところのグレートスピリットとは正に仏教で言うところの大我であり、50回忌が終わると神様になるとか祖霊と融合するという思想も正にこれと同じです。

## ③ 靈性（神性）としての霊

さて、最後の余白になってしまいましたが、この靈性（神性）が実は我々にとって一番無くてはならない大切なもので、これはつまり感動のことです。感動はあらゆるものに宿り、媒介し、何かを伝えます。靈性の重要な点は、この世の物理法則や常識を超越して我々に訴えかけてくることに尽きるでしょう。それはつまり、皆さんが日々与えたり与えられたりしている愛情や信頼や情熱から生まれ、やがては誰かに何がしかの感動を必ず与えます。そしてその感動は機械には決して真似できません。繰り返しますが、感動こそが人間が靈魂であるが故に持つ靈性であり敬われるべき神性そのものなのです。